

一人ひとりを受け入れているんだなと温かい気持ちになります。

また、園庭がないからお散歩にたくさん行けることが新鮮で楽しいです。子どもと手をつないで信号を渡るなんて、あたりまえのことですが大規模園ではあまり多くはできないことですね。

近所の人との交流もさかんで、お散歩に出ると声をかけてもらえたりして子どもたちもとっても楽しそうです。

(2015年度から東京都内の「おうち保育園」勤務)

コラム

おひさま保育室 小規模保育を日本のスタンダードに

東京都東久留米市。東京とは思えない閑静な住宅街の一角に「おひさま保育室」があります。もともと住居として使用されていた家をそのまま保育室に転用しており、一歩足を踏み入れた瞬間から温かさが伝わってくる、そんな空間です。

「おひさま保育室」のルーツは、2012年にスタートした「家庭的保育¹³ おひさま保育室」にあります。2015年4月に始まった「子ども・子育て支援新制度」に伴い、小規模保育事業A型の認可保育所へと移行しました。現在は「一般社団法人 あんずの木」がその運営を担っており、定員は11人となっています。

室長の和田優子さんは、元々東久留米市の市立保育所で13年保育士として勤めたのち、大学事務などの仕事を経て、家庭福祉員¹⁴になり保育の世界に戻ってきたという経歴をお持ちの方です。

ある出来事が和田さんに小規模での保育という道を開かせることになりました。

「2008年、臨時保育士として久しぶりに保育の現場に復帰することになりました。そこで私は、保育の現場が大きく変化していたことに気付いたのです。時代と社会状況が変わり、保育士は質量ともに様々な種類の仕事に追われていたのです。

待機児童解消のためには多くの児童を受け入れなければならず、それを引き受け最善な保育を提供しようとする保育士の積極的な意欲も感じました。しかし、どんなに質の高い保育士であっても、互いの保育観を共有するような場を持つ余裕もなく、様々な規範に縛られていては能力をなかなか発揮できず、葛藤を抱えます。

ある日、親しくなったある保育士が「保育士をやめたい」ということを口にしたのです。「キャリアもあり、こんな素敵な保育士が保育をやめてしまうなんて、そんなのおかしい！」そう思った私は、彼女自身が彼女のしたい保育ができる方法が何かないだろうかと考えました。そして認可外保育に取り組む友人のアドバイスによりたどり着いた答えが、家庭福祉員という制度を用いた小規模な保育でした」

保育士が自ら実践したい保育を追求する余裕を持てること。「人生の入り口」という大切な時期にある子どもたち一人一人と真摯に向き合えること。2012年5月、「おひさま保育室」は和田さんのそんな想いから始まりました。

「家庭福祉員を始めたのも、初めからその保育の意味を理解していたわけではなく、たまたまたどり着いたものでした。でもいざ始めてみると、「すごい！」って思ったのです。私が最初に保育士になった東久留米市の公立認可保育所では歴史的に「東久留米方式」といって大型園は施設建設の時から0～2歳児を4クラスに分け少人数で保育をしていました。その時代に同僚の保育士たちと、子どもたち一人一人としっかりと向き合うことの大切さについて学び合い、「脳と保育」や心身の発達に関係する書籍などを読んで質の良い保育に取り組んでいましたが、自分で0～2歳児少人数混合保育をやってみて、改めてその重要性が実感を持って分かり、目が覚めたような思いでした。

私は「人が人であるとはどういうことか」を学び、考え、人を、社会を

¹³家庭的保育とは、保育者の居宅、その他の場所で行われる5人以下の異年齢保育のことで、「子ども・子育て支援新制度」において行政の認可事業として位置づけられている。

¹⁴家庭福祉員とは上記の家庭的保育を担う人物を指す。

信頼し、それに支えられ、またその経験を基に今度は自分が支える側の人間になり、気前よく自分自身の力を社会に還元していく、そんな人たちが育っていく場を作っていきたいですし、そういう社会にしたいと願っています。

わたしたち「おひさま保育室」は小さな場所ですが、それを実践している存在でありたいと思っています。でも、それだけではなく、0～2歳児の保育は小人数で、あるいは小規模で丁寧に、というのが日本のスタンダードにならないかと願っています。」

試行錯誤の末、小規模での保育という「答え」にたどり着いた和田さんは、誰よりも小規模保育の重要性を実感しており、「おひさま保育室」だけにとどまらず、今後は「小規模保育がスタンダードになるように」その活動を広げていきたいと語ってくれました。

「小規模保育はヨーロッパ先進国では当たり前になっているようですが、日本ではまだまだ新制度も始まったばかりで、その認知度の低さに戸惑いを感じることも多くあります。次世代の子どもたちを育て、将来のより良い社会を作るということを大切に思う多くの方たちと協力して、粘り強く活動を続けていきたいです。」